シーユーネヴァーランド

ねこ

桜をたべた。

「なにやってるの」

案の定あきれた声が隣から投げられて、空からそっちに顔を向ける。きっちり規則通り着られた紺のブレザー。同色の膝丈まで伸びたスカート。さらさらと肩にかかる黒い髪。丸いようで少しつり目な黒い瞳。俺は舌の上に乗った桜の花びらを吟味してみた。もぐもぐもぐ。

「ちょっと降ってきたから、いけるかなあって口開けただけやったんやけど」

「うん」

「見事にひとひら俺の口にゴールインしまして」

「うん」

「ぜんぜんおいしくないです」

「でしょうねばか」

ばっさりずばっと切り捨てられた俺は、流血した気がする胸を掴んでよろめく。それと一緒に桜も飲み込んだけど、やっぱりおいしくない。吐き出した方がよかったかな。お腹壊れるかな。実は毒性があって死んじゃったりして。でも俺この子幸せにしなきゃいけないから死ねないわー残念だわー。

「ばかなこと考えてるでしょ」

「おぬしまさか読心術をお持ちになられていらっしゃるお方であられていらっしゃる痛いごめんなさい」

足を蹴られた。反省する。彼女は清楚で真面目で大人しいおんなのこなのに、俺に対しては扱いがあからさまに荒い。それが愛の印なのですねうふふ。なんつって。

強い風が吹いて、桜の花びらたちが俺たちに降り注ぐ。桜の開花が宣言されてから数日、彼女と放課後の寄り道という名のデートがてらやってきた並木道は桃色で溢れ返り、早くも終わりを告げるかのように花びらたちが晴天の空から地面へ旅立っていく。強い風に、彼女はやや鬱陶しげに顔をしかめて髪を抑えている。俺にしてみれば桜の雨を歩く彼女の姿はとってもきれいなので、いつまでも見ていたい所存なのだけれども、言ったらまた怒られる気がするので。

「きれいやなあ」

真正面に彼女を見てそれだけ言うことにした。予想通り彼女は一瞬固まって、不服そうに目を逸らすと「そうね桜はきれいね」とこれまた予想通りの言葉を返してくる。照れ屋さんなところも褒められるのが苦手なところも、出会った頃から変わっていない。

「そういえば」

「なに」

不機嫌そうな顔してもかわいいだけよ、とはとりあえず伝えておかない。
「お前がこっちに転校してきてもうすぐ一年やね」
「……ああ」
そういえばそうね、と、そういえばという感じでもなく彼女が呟く。彼女が東京から大阪にやってきて、俺の通う高校に転校してきた六月。彼女は俺と出会ってどれぐらいたったとか、考えてくれたことあるかな。あったらいいなあ。
「なんだかんだで、ずっと標準語のままやな」
「関西弁になってほしいの」
「ううん、お前には綺麗なままでおってほしい」
「全国の関西弁の人に怒られるわよ……」
彼女に呆れた声を出させる数は計りきれない。へへへと笑って、彼女の手を握ってみた。彼女はなにも言わず、ちょっとだけ息を吐くだけだった。そのまま桜の道を歩きつづける。
俺たちが出会って一年弱。俺たちの初めての四月がやってきて、俺たちは高校生二年生から三年生になった。夏を一緒に過ごし、秋を一緒に過ごし、冬も一緒に過ごした。たくさんいっぱい過ごした。どれもきらきらの宝石みたいな時間。
「なあ」
「なに」
「すきよ」
「……、なんで女の人口調なの」
「うふふふ」
「きもちわるい」
振り払うように握った手をぶんぶん揺らされるけど、決して振り払われない。彼女もぎゅって握ってくれてる。受け入れてくれてる。それはすごくすごく嬉しいことで、とてもとても幸せなことで。
「いい天気やねえ」
「そうね」
「桜もきれいやし」
「そうね」
「おまえもきれいやし」
「それはどうかな」
「しあわせやねえ」
「……そうね」
あ、ぎゅってしたくなった。怒るかな。怒られてもしたいなあ。でも、さすがに並木道には俺たちと同じく桜を見に来た人たちもそれなりにいて、そこで俺の思うがまま行動しちゃうのはさすがに申し訳なさすぎる気がする。道のど真ん中だし。さすがに俺も少し恥

ずかしいかも。俺にだって一応羞恥心はあるのですとも。彼女のためならすぐにでも捨てられるごみくずみたいなものですけれども。

全身をぎゅっとはできないけど、腕と腕をぎゅっとくっつけてみた。彼女はやや窮屈そうな鬱陶しそうな顔をしたけど、「なにすんの」で済ましてくれる。周りから見れば、桜とは違う花が咲いていそうな俺たちはそのままゆっくり歩いていく。

「もう四月かあ。早いなあ」

「そうね。……受験もきっとすぐね」

彼女は清楚で真面目だから、そういう話も簡単にする。俺はそれが少し羨ましくて、少し心がもやもやしたりする。俺は笑うだけで何も言えなかった。彼女がなにか言いたそうに俺を見上げる。

これからもまだ一緒にいられる。初めての五月を迎えて、二度目の六月がやってくる。でも、二度目の四月には俺たちは一緒じゃない。俺には夢があって、彼女には俺と違う夢があるからだ。そのことで少し彼女と喧嘩したこともあったけど、今ここで特別に筆を持って書くことでもない。とにかく俺たちはばらばらになって、ばらばらに大人になっていくことになる。

「なあ、すきよ」

「……さっき聞いた」

「すき」

「聞いた」

「すきーすきすきー」

「……はいはい」

あきらめて彼女は俺の肩に頭をこつんと預けた。彼女は俺の弱さを知ってる。俺も彼女の弱さを知ってるけど、最近は俺の方が彼女に頼りきりな気がする。よくない傾向だ。今度ケーキでも奢ってあげようかな。

もちろん、卒業して毎日会えなくなったって、俺たちは時間を作って会ってこうして一緒に歩いたり手をつないだりするつもりで満々だけれど。俺はなにをこんなに怖がっているんだろう。毎日会えない寂しさ。俺の知らない彼女が勝手に増えていくこと。俺たちが大人になってしまうこと。何も知らずただ一緒にいられたらそれだけでいいわけじゃなくなってしまう、かもしれないこと。考え出したら意外と出てきてしまった。しまったしまった。

俺は彼女が好きで、彼女も俺を好きでいてくれて、きっとずっと一緒にいてくれる。一緒にいられる。俺は信じてる。でも、大人になるということがどういうことかわからない。好きなものが離れてしまう可能性が怖い。好きなことを好きなだけしていてはダメって大人は言う。なんでだめなんだろう。俺は好きなものが傍にいてくれたらそれだけで幸せなのに。もちろん彼女を縛り付けたいわけでは絶対にないし、彼女にも好きなことをしてほ

しい。それでも残るこのもやもやを、俺はいつまでも扱いきれない。
「大丈夫？」
声にはっとして見下げると、心配そうに揺れる瞳に驚いた。俺はそんなに情けない顔をしてしまったのかな。ほんとに情けないだけでどうしようもない。この小さくて優しい手があるだけで俺はどこまでも強くなれるはずなのに。
「だーいじょうぶでっすよお」
「うそつき」
「うはは」
また足を蹴られる。痛い。でもここで弱さをまた零しちゃうほど俺は羞恥心を捨てきれないらしいのですよ。好きな子の前では強がっちゃうお年頃なのですよ。全然強がれてねえって話だけど。
お互いがお互いを見てしまっていた所為で、二人して彼女にぶつかってきた何かにすぐさま反応できなかった。俺たちの足の長さくらいしかない小さな男の子。走り回ってたのか頬が桜よりも鮮やかな朱色に染まっている。どうやら前を見ずに走ってきて俺たちという障害物にぶつかってしまったらしい。
「ごめんなさいでした！」
なんとも勇ましい謝罪。きりっとした顔で俺たちの返事も聞かず、男の子は俺たちを通り過ぎて、少し遠くにいる見知らぬ大人たちに体当たりをした。どうやらご両親らしい。お父さんが男の子をぎゅっとしている。表情まで見えないけど、あたたかな家族の光景。
「かわいいなあ」
「……うん」
生返事が返ってきたので彼女に目線を戻すと、彼女はぼんやりとその家族を見つめていた。俺は少し言葉を迷って、まだ迷いながら、口にしてみる。
「子どもとか、ほしいって思う？」
彼女がきょとんとした顔して俺を見直した。ぱちんぱちんと瞬きふたつ。彼女もまた迷うように目を横に逸らして、ぎこちなく頷いた。
「……いつか、大人になって、新しい家族ができて」
つながったままの手を、ぎゅっと、離れないように握られる。
「自分の子どもがいて、きれいな家を買って。そこで仲良く暮らせたら。……素敵だなって、思う」
ほんのりとした朱色は、彼女のものか、俺のものか。
羞恥心がくずになって桜と一緒に飛び散っていく。手を放して俺は彼女をぎゅっとした。
「ちょ」
俺の肩でくぐもった彼女の抗議が聞こえる。聞こえないふりを決め込むことにした。なあ、俺だって何度も夢見てきたよ。お前に冗談みたいに言ったこともたくさんあった。子

どもが買えるようなペアの指輪をプレゼントした。俺も大事にしてるしお前も大事に持っていてくれてる。あのときもそのときも今もその気持ちは本物なのに、信じてるのに、どうして俺は今こんなに嬉しくて不安で幸せなのかな。

このどうしようもない気持ちを、今すぐ伝えたい気持ちを、俺はずっと持て余している。大事にしたい大切にしたいずっと一緒にいたい。誰よりも誰よりも、世界中の何よりも誇れる自信があるはずなのに。

「すき」

「だから、聞いてるって」

「だいすき」

「……わかってるってば」

今これ以上の言葉を言ったって、そこに重みはあんまりない。それは俺が子どもだから。何も持てない力のない子どもでしかないから。俺はなれるかな。俺の好きなものをちゃんと手に入れて、ちゃんとこの想いが本物だって言えるときがくるかな。来てくれるのを待つんじゃなくて、掴みに行かなきゃいけない。できるかな。だいすきなだいすきなお前がいたら、俺はどこまでも強くなれるかな。

「俺がんばらなね」

「なにが」

「マイホーム買えるぐらい、がっぽがっぽ稼がんとね」

「……ばか」

これがせいいっぱい。砂糖とミルクとバターを混ぜて、ただあまい匂いに酔いしれるのが今の俺たち。ジャムみたいにどろどろに溶け合いたくても、俺には責任を持つ力がない。ほしかったら、大人になるしかない。なって手に入れられるかまだわからなくとも。

だって、彼女とずっと一緒にいたいから。彼女とまだ見ぬ小さな子どもとマイスイートホームに、手をつないで帰りたいから。

なんつって。どれだけ薄味に見えても本気だけど！

「ねえ」

「ん、なに？」

「わたしも、ちゃんと、すきだから」

今度は俺がきょとんとする側だった。ちょっと彼女から離れてお顔をお伺いする。桜よりもさっきの男の子よりも真っ赤だった。残念ながらあまいケーキが大好きな俺に耐え切れるわけもなく、せめて口にするのを我慢してほっぺにちゅーをした。真っ赤がまっかっかになった。

「ばか！」

全身全霊で腹に拳が貫かれる。俺は気持ちだけ口から血を吹いてよろめく。ああかわいいなあ。かわいいかわいい。これが俺の宝物。手をつないでいたい女の子。ずっと一緒に

いる。ぜったいのぜったい。世界中の誰もがばかにしたって、俺は信じてるけど！

おわり